

介護過程の教授方法についての研究

－思考力の向上に有効な授業計画－

戸館 康秀 一般社団法人仁生会 にしぼり

キーワード 介護過程、アクティブラーニング、介護実習、仮説思考

I 研究背景と目的

介護ニーズが複雑化、多様化、高度化するなか、より専門性の高い介護福祉士の育成が求められ、介護過程の展開による根拠に基づいた介護の実践が重要視されている。介護福祉士養成カリキュラムにおいて介護過程は、平成21年に150時間の必修科目として位置づけられ、平成29年10月にとりまとめられた社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会の報告書「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」の介護福祉士養成課程の教育内容の見直しにおいても、領域「介護」の目的に「各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養う」と、介護過程の実践力の向上が追加された。

その人らしい生活を実現するための客観的で科学的な思考過程を学ぶことは極めて重要であるが、介護過程の教授方法には課題も多い。日本介護福祉士養成施設協会による「令和2年度社会福祉推進事業 介護福祉士養成施設の教員の教育力向上に関する調査研究事業 報告書」によると、介護教員講習会の「学び直しや受講の必要性」の調査結果では、介護過程の展開方法を「とても必要」と回答し

たのは全17科目のなかで最も多く44.8%であった。また、「見直しが必要と考える介護教員講習会の科目」のなかで、介護過程の展開方法は8.7%と最も高い値である。その理由についても、「何が正解かわからないところがある」「思考が浸透していないと感じる」等、数多くの意見が寄せられている。介護過程については多くの先行研究が存在するが、明確な教授方法はまだまだ発展段階であるといえる。

実際に介護過程の教授に携わる筆者も、教科書によってアセスメントの解釈が異なる点や、文章だけで読み取る事例検討では学生の介護過程に対する理解度を向上させるのは難しいことを実感している。介護過程の教授方法が体系化されないことは、専門職としての介護福祉士の育成に影響が生じると考え、介護過程を学ぶ学生の理解度、及び思考力の向上に有効な教授方法を見出すことを本研究の目的とした。

II 研究方法

1. 研究対象、及び研究期間

筆者が介護過程の教授や介護実習指導に携わったのは平成30年度から令和元年度まで

のA短期大学2年間、令和2年度から令和4年度までのB専門学校3年間、合計5年間である。5年間で得られた介護過程に関する情報を基に、令和4年度B専門学校の1年次学生10名を対象として、合計30回で構成される介護過程の授業を研究期間とする。

2. 研究内容

①学生が展開した介護過程の調査

介護福祉士養成課程のカリキュラムにある介護実習の教育の視点には、「介護過程の展開を通じて対象者を理解し、本人主体の生活と自立を支援するための介護過程を実践的に学ぶ内容とする。」と示されている。学生は介護実習を通じて実践的に介護過程を学習することから、対象利用者を受け持つ2年次長期実習(以下、介護実習Ⅱ)終了後に実施される「介護実習Ⅱ報告会」の資料を基に、介護過程の実施状況を調査し課題を抽出する。報告会資料の主な構成は、「受け持ち利用者記録(基本情報)」「アセスメント情報(現在の疾患、既往歴、生活の状況)」「情報の解釈・関連づけ・統合化(生活課題の根拠)」「カンファレンス(職員からのアドバイス)」「実施状況・評価(実践の状況)」「おわりに(全体の振り返り)」「立案した介護計画書(添付資料)」となっており、限られた介護実習の期間内で一連の介護過程の展開プロセスを学習できるよう、複数の生活課題を有している場合は、解決の優先度が高いと学生が判断した課題を抽出するよう教員より指導されている。

②抽出した課題を解決するための教授実践

抽出された課題を基に、令和4年度B専門学校で介護過程を学ぶ1年次学生10名を対象に教授する。なお、令和4年度の介護実習Ⅱ報告会の資料は、1年次学生の教授と同時

進行で調査した。光成は「従来のような知識伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修、アクティブラーニング(Active learning)への転換が必要である。」(光成 2020:p.5)と、文部科学省が言及した内容について述べている。介護過程の理解度、思考力の向上を目指すためには、学生が主体的に授業へ参加する必要がある仮説のもと、授業ではアクティブラーニングを取り入れる。佐藤は「アクティブラーニングを促す教育技法は多様に存在している。まずはその種類を理解し、自らの授業において設定した目標に学生が到達するのに効果的なものを選択することから始める。」「学生がアクティブラーニングを行っている最中には、ファシリテーションを行う。」(佐藤 2021:pp.114-116)と、アクティブラーニングを促す教育技法例とファシリテーターの基本スキルを示している。授業ではファシリテーションを行うことを基本として、5つの教育技法を組み込んだ内容とする(表1)。また、アクティブラーニングを効果的に実施し、机上ではイメージしづらい対象利用者をより理解しやすくするため、1年次で実施される通所介護実習、障害者支援実習、認知症対応型共同生活介護実習での各2日間の短期介護実習(以下、介護実習Ⅰ-1)と、介護老人福祉施設(以下、特養)、または介護老人保健施設(以下、老健)での担当利用者の受け持ちはない20日間の長期介護実習(以下、介護実習Ⅰ)を介護過程と連動させて授業計画を立案する。

③介護過程の理解度、及び思考力向上の評価
教育技法である「ミニッツペーパー」を用

いて思考力を培う時間を確保し、授業の振り返りを行うことで理解度を確認。最終評価は、令和4年度全体の授業終了後に実施される学生による「授業アンケート」の結果で確認することとする。

④本研究における介護過程の展開プロセスの定義

本研究での介護過程の展開プロセスの定義は、B専門学校で活用されている2022年に中央法規から出版された「最新 介護福祉士養成講座9 介護過程」の教科書に示されている「アセスメント」「介護計画の立案」「介護の実施」「評価」の4構成を基にするが、介護過程に対する学生の課題をより深く抽出する観点から、アセスメントを「情報収集」と「情報の解釈・関連づけ・統合化・生活課題の抽出(以下、情報の分析)」に分類し、5構成の展開プロセスとする。

3. 分析方法

介護実習Ⅱ報告会の資料から得られた情報は、「学生情報(性別、実習施設種別)」「対象利用者情報(性別、年齢、要介護度)」「介護

過程について(抽出した生活課題、抽出した理由、難しかった項目)」で分類し、それぞれの傾向把握のために単純集計とする。介護過程についての「抽出した生活課題」は、生活支援の内容別でカテゴリー分類し、「抽出した理由」は、利用者本人の訴えが明瞭であった「本人の希望」か、利用者本人の訴えが不明瞭であるが、情報収集を基に本人が望む生活を考えた「可能性を考察」したのかで分類し集計。介護過程を展開するにあたって学生が感じた「難しかった項目」は、全体の振り返りが記載してある「おわりに」から調査し、本研究で5構成に分類した介護過程のプロセス段階別で集計する。これらの方法で、学生がどのような現状の利用者を受け持ち、介護過程のどのような課題に直面したかを分析していく。また、各ミニッツペーパーで得られた情報も類似カテゴリー別での集計方法とする。

授業アンケートに関しては、学生の自己評価2問(1. 受講態度、2. 授業への積極性)、教員の評価8問(1. シラバスの有効性、2. 授業の進行、3. パワーポイント等の有効性、

表1 アクティブラーニングを促す教育技法とファシリテーターの基本スキル

アクティブラーニングを促す教育技法		
番号	名称	説明
1	シンク・ペア・シェア	考える、2人組、共通の順序で段階的に議論させる技法。
2	バス学習	小グループごとに議論させる技法。あるテーマについて6人グループで6分間の議論を行った後、全体としての結論にまとめていく。
3	ワールドカフェ	グループ内の議論の成果をほかのグループとの間でも共有する技法。グループ内で一定時間議論をした後、一人を除いたほかのメンバーがそれぞれ別のグループの議論を聞きに行く。
4	ミニッツペーパー	授業終了時に学生にコメントを書かせる技法。
5	ピア・インストラクション	教員が提示した課題について、学生同士で解答を考え出させる技法。
ファシリテーターの基本スキル		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 質問をする ・ 掘り下げる ・ わかりやすくいいかえる ・ 質問や発言の方向を転換する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ すでに出た意見やアイデアを振り返る ・ 応援する ・ 発言の少ないメンバーを引き入れる ・ 異なる意見を歓迎する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視点を変える ・ 要約する ・ 橋渡しをする

出典：佐藤浩章「第6章 教授法」『実務家教員の理論と実践 人生100年時代の新しい「知」の教育』p.115、2021を一部改変

4. 質問への対応、5. 学生参加を促す授業、6. 知識や理解度の確認、7. 意欲や熱意、8. 総合満足度)、自由記述1問の、全11項目で構成されている。質問項目に対して選択式5段階評価となっており、特に学生の視点から授業の評価が確認できる教員の評価8問と、自由記述1問の合計9問の回答結果で教授方法の有効性を分析する。

4. 倫理的配慮

A短期大学、B専門学校の学科担当教員、対象の学生へ本研究の目的を説明し同意を得た。対象の学生には、研究目的をより一層理解してもらうため、授業内で得られた情報の集計結果をその都度開示し、授業アンケートの結果は成績に影響を及ぼさない旨を説明する方法をとった。個人が特定されないようプライバシー保護に留意し、収集したデータは筆者が一元的に管理した。

III | 結果

1. 学生が展開した介護過程の分析結果

平成30年度から令和4年度の介護実習Ⅱ報告会の資料を調査、分析した結果、男性23名、女性46名の合計69名の学生から情報を得ることができた(表2)。介護実習Ⅱの施設種別は、「特養」55%、「老健」45%であった。

利用者情報として、性別は男性3%、女性97%と圧倒的に女性利用者を対象とする学生が多く、年齢は80代と90代が各41%で最も高い傾向であった。要介護度別では、特養の入居要件が平成27年4月から原則として要介護3以上となっていることも影響されている可能性はあるが、「要介護3」26%、「要介

護4」28%と高く、「要介護1、2、5」が10%台、文書内に要介護度の記載がなかったもの1%であった。

介護過程について、抽出した生活課題をカテゴリー別に分類した結果、「歩行・身体機能向上」13%、「食事支援」20%、「余暇・役割活動の充実」61%、「入浴支援」2%、「排泄支援」4%で、「余暇・役割活動の充実」が最も多い傾向であった。抽出した理由では、「本人の希望」14%、「可能性を考察」86%で、対象利用者のできる可能性や解決の必要性を考えて課題を抽出している傾向であった。介護過程の展開で難しかった項目では、「情報収集」57%、「情報の分析」23%、「介護の実施」3%、資料では分類困難な「不明」17%、「介護計画の立案」と「評価」0%であった。文書内からは、「複数の項目で難しさを感じたが、特に情報収集が難しかった」との記載も見受けられた。「情報収集」に難しさを感じている理由として、「認知症等による疾患によりコミュニケーションが難しかった」や、「本人の思いを聞き取る、または考えるのが難しかった」との内容があり、収集した情報を統合化させる思考力が問われる情報の分析にも関連する記載が多い傾向であった。

以上の結果から、介護過程は情報収集と情報の分析に重点を置いた教授が必要であることが明確となった。

2. 介護過程の理解度、及び思考力の向上を目的とした授業計画と教授結果

情報収集と情報の分析に重点を置いた教授を実践するにあたり、ファシリテーションを基本としたアクティブラーニングの教育技法を取り入れ、介護実習Ⅰ-1、介護実習Ⅰを連動させた授業計画を立案した(表3)。ミ

表2 介護実習Ⅱ報告会資料の分析結果

分類			A 短期大学		B 専門学校			合計 (%)
			平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	
学生情報	性別	男性	3	0	4	7	9	23 (33%)
		女性	2	8	11	10	15	46 (67%)
	実習施設種別	特養	3	7	6	9	13	38 (55%)
		老健	2	1	9	8	11	31 (45%)
対象利用者情報	性別	男性	0	0	0	1	1	2 (3%)
		女性	5	8	15	16	23	67 (97%)
	年齢	50代	0	0	1	0	0	1 (1%)
		60代	0	0	0	0	1	1 (1%)
		70代	0	0	2	2	5	9 (13%)
		80代	2	4	9	7	6	28 (41%)
		90代	3	4	3	8	10	28 (41%)
		100代	0	0	0	0	2	2 (3%)
	要介護度	1	1	0	2	2	2	7 (10%)
		2	1	2	5	1	2	11 (16%)
		3	0	4	5	4	5	18 (26%)
		4	3	0	0	6	10	19 (28%)
		5	0	2	3	4	4	13 (19%)
		不明	0	0	0	0	1	1 (1%)
介護過程について	抽出した生活課題	歩行・身体機能向上	1	2	2	2	2	9 (13%)
		食事支援	1	1	3	5	4	14 (20%)
		余暇・役割活動の充実	3	4	10	10	15	42 (61%)
		入浴支援	0	0	0	0	1	1 (2%)
		排泄支援	0	1	0	0	2	3 (4%)
	抽出した理由	本人の希望	1	3	4	0	2	10 (14%)
		可能性を考察	4	5	11	17	22	59 (86%)
	難しかった項目	情報収集	2	7	8	9	13	39 (57%)
		情報の分析	2	1	1	6	6	16 (23%)
		介護計画の立案	0	0	0	0	0	0 (0%)
		介護の実施	0	0	0	1	1	2 (3%)
		評価	0	0	0	0	0	0 (0%)
		不明	1	0	6	1	4	12 (17%)

ニッツペーパーは「可能性を考える」「理由を考える」を学生への課題として、30回目の「総合まとめⅡ」を除いたすべての授業で実施。介護実習前では、他の授業と介護過程の連動性を理解するためにテーマに沿ったグループワークを実施し、コミュニケーションを主として関わった利用者の情報収集を行うよう課題を提示。介護実習後に自己の情報収集と情報の分析の振り返りを行った。

通所介護実習前の5回目の授業では介護過

程の基礎的な理解に重点を置いたが、その他9回目、12回目の授業では介護実習Ⅰ-1前の知識の再確認と思考力の向上を目的として、ノーマライゼーションとパーソン・センタード・ケアについて考えるグループワークを実施。6回目、10回目、13回目の介護実習Ⅰ-1の振り返りでは、関わった利用者の生活課題を、直接的情報収集のみから考える時間を設けた。情報が不足していることを学生自らの体験を通じて感じてもらい、記録や

数値等から得られる間接的情報収集や分析方法を段階的に教授した。

15回目の授業では合計3回の介護実習I-1で実施した情報収集と情報の分析の自己課題を考える授業を実施。自己課題を解決することを達成目標としたその後の16回目の介護実習Iの振り返りとして、学生が感じた難しかった情報収集の項目をICFモデルで分類した結果、「健康状態0%」「心身機能・身体構造0%」「活動15%」「参加31%」「環境因

子8%」「個人因子23%」、総合的に難しかった「本人の思い23%」であった。不足していたと感じる情報収集の項目は「健康状態3%」「心身機能・身体構造0%」「活動44%」「参加16%」「環境因子19%」「個人因子9%」「本人の思い9%」であり、実際に関わった対象利用者の生活課題を解決するための振り返りが、学生主体で考えられていた。対象利用者のイメージが構築されているため、根拠が不明確でありながらも生活課題が捉えられてい

表3 アクティブラーニングの教育技法と介護実習を連動させた授業計画

回数	授業テーマ	学生への課題と介護実習との連動	教育技法
1	自己開示	苦手を好きにするには	1
2	求められる介護福祉士像	介護福祉のイメージを考える	5
3	生活支援とその人らしさ	自分と他者の価値観を考える	5
4	ICFモデル	事例の情報をICFモデルで整理する	2
5	介護過程の基礎的理解	旅行計画を考える	2
通所介護実習 (2日間)			
6	介護過程の展開の実際I	通所介護実習を振り返る	3
7	情報収集I	情報収集の視点を考える	1
8	情報収集II	客観と主観を考える	1
9	障害の理解と介護過程	ノーマライゼーションを考える	5
障害者支援実習 (2日間)			
10	介護過程の展開の実際II	障害者支援実習を振り返る	3
11	中間まとめ	介護過程の重要性を考える	1
12	認知症の理解と介護過程	パーソン・センタード・ケアを考える	5
認知症対応型共同生活介護実習 (2日間)			
13	介護過程の展開の実際III	認知症対応型共同生活介護実習を振り返る	3
14	情報の分析I	事例の情報を分析する	1
15	情報の分析II	情報収集と情報の分析の自己課題	1
長期介護実習 (20日間)			
16	介護過程の展開の実際IV	長期介護実習時の情報収集を振り返る	3
17	介護過程の展開の実際V	長期介護実習の対象者の生活課題を考える	3
18	生活課題の明確化	不足していた情報を考える	1
19	介護計画の立案I	教科書事例の立案	1
20	介護計画の立案II	教科書事例の立案	1
21	介護の実施I	事例を基にした実施状況の記入	1
22	評価I	事例を基にした評価の記入	1
23	介護過程の展開の実際VI	長期介護実習の対象者の介護計画を立案する	3
24	介護の実施II	立案した介護計画の演習	5
25	評価II	演習の評価	3
26	事例演習	立案、実施、評価を振り返る	3
27	ケアマネジメント	家族の思いを考える	5
28	チームアプローチ	専門職の特徴を考える	1
29	総合まとめI	介護過程の重要性を段階的に考える	2
30	総合まとめII	選択式小テスト	

る傾向にあったが、「生活課題はイメージできるが文章化が難しい」といった声が多く聞かれていた。そこで、教科書にある「収集した情報の整理」「情報の分析」「生活課題の明確化」とは逆の手順で、「学生がイメージした生活課題」に、「なぜその生活課題だと思ったか(情報の分析)」「関連する情報はどこから得られたか(収集した情報の整理)」といった根拠を肉付けしていく教授を行った。その文章化においても、「利用者の現在の状況」+「現状が続くことにより想定されるリスク」+「より良い生活のためのできる可能性」という3段階で情報を統合化させ、イメージした生活課題を根拠あるものに磨き上げていった。

23、24、25回目の授業では、介護実習Ⅰで関わった対象利用者の介護計画を立案。利用者役と介護者役に分かれた学生2～3名の合計4グループで、計画した介護を実施し、その評価を行った。なお、学生が抽出した生活課題は、4グループとも対象利用者の現在の状況から「可能性を考察」し、実施の必要性があると判断した「余暇・役割活動の充実」

に関する内容であった。介護の実施では、教科書の事例を基にした机上の学習とは異なり、介護技術演習を通してより相手の気持ちを考え、自己課題を振り返る様子が見受けられた。

以上の教授を行い、29回目に実施した「教科書の事例を参考にした授業と、介護実習で関わった利用者を参考にした授業を比較した際、どちらの授業が理解しやすかったか」のミニツッペーパー結果は、「教科書事例が良かった10%」「介護実習事例が良かった90%」となった。教科書事例が良かった理由は「自分の情報収集不足が現れたため、情報が揃っている教科書の方が理解しやすい」、介護実習事例が良かった理由は「教科書の事例よりその場の状況や利用者の特徴も理解しやすかった」「頭の中でイメージしやすい」や「他の学生が関わった利用者の細かな気持ちや反応を知ることができた」という内容であった。

3. 授業アンケート結果

令和4年度全体の授業終了後に実施された

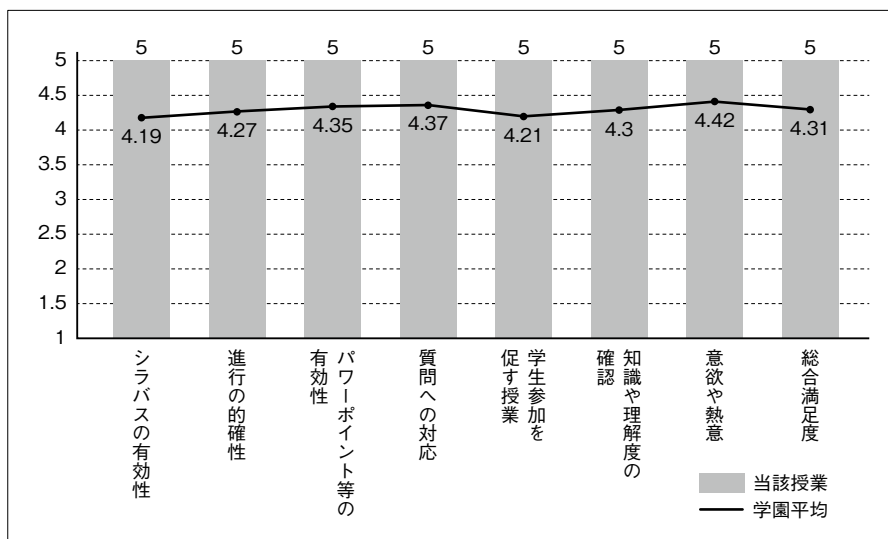


図1 令和4年度 B専門学校 授業アンケート結果

学生による「授業アンケート」の結果では、8つの質問すべてが最高値の5となり、自由記述への回答は「生徒を巻き込んでくれる授業なので、居眠りをしている学生がいませんでした」の1つであった。B専門学校の当該授業の学園平均値は4.3であった(図1)。

IV | 考察

1. イメージの構築と主体的な振り返りの重要性

情報収集と情報の分析に重点を置き、介護過程の理解度と思考力を向上させるには、学生が主体的に学習できる教育技法と、対象利用者をイメージすることができる介護実習を授業計画へ組み込んだ教授が有効的であった。平野は「教科書ではなく先輩が経験した『リアルな事例』を追体験することが理解を促進させる」(平野 2020:p.35)と介護過程の教授方法について述べており、小川、森永は「自分の思考を文章化していくことは、学生にとっては容易な作業ではない」「そこで、自己の介護過程の展開について、振り返りの時間が重要となってくる」(小川、森永 2022:p.414)と介護過程の実践報告会の有効性について述べている。今回の教授に関しても、「リアルな事例」を学生に提示し、報告会だけではない授業全体に振り返りの時間を組み込んだことが、授業アンケート結果にも反映されたと考える。

2. 仮説思考の有効性

授業を進行するなかで、対象利用者の思いを聞き取る「情報収集」を難しいと感じている学生は、介護実習Ⅱ報告会の資料から得られた結果と同様に多く見受けられたが、疾患

の影響や遠慮等から直接的に思いを聞き取れない利用者が多い傾向であったため、情報を関連づけ、統合化させて本人の思いを推察する「情報の分析」に重点を置く教授の必要性が高いと考えた。ICFモデルに沿った情報収集を行い、趣向を凝らした情報の分析が可能となったのも、介護実習Ⅰ-1から介護実習Ⅰにかけて段階的に課題を提示し、主体的に自己課題を振り返らせる授業計画が効果的であったと考える。しかし、情報を分析し、生活課題をイメージすることができても難しさが生じたのが「根拠の言語化」であった。イメージした生活課題は決して間違っていない傾向であったことから、取り入れた追加の教育技法が「仮説思考」である。これは論文の基本的な構成と同様であり、後藤らは「アウトラインでは、自分の主張にあたる『結論』から考えます」「『結論』が決定したら、『結論』を支えるため『根拠』を考えます」(後藤他 2014:p.84)と示しており、ビジネスシーンにおいては佐藤が、「問いの設定から、ゴールのイメージの検討を早々に始め、ゴールと現状とのギャップを明らかにしながら仮説検証型でゴールの質を磨き上げていく方法を指す」「うっすらなりにも仮説があるからこそ、その後突き詰めて検証していくべき『論点』(仮説の検証を行う上で対象となるポイント)が明確になり、どのような情報を集め、どのような検証作業を行えばよいのかの方針が見えてくる」(佐藤 2018 : pp.46-47)と問題解決アプローチについて述べている。情報の量に惑わされ、取捨選択に難しさを感じる場合や、課題が本当に妥当なのか検証する上でも、仮説思考は非常に有効であった。

3. 専門職として介護過程を学ぶ意義

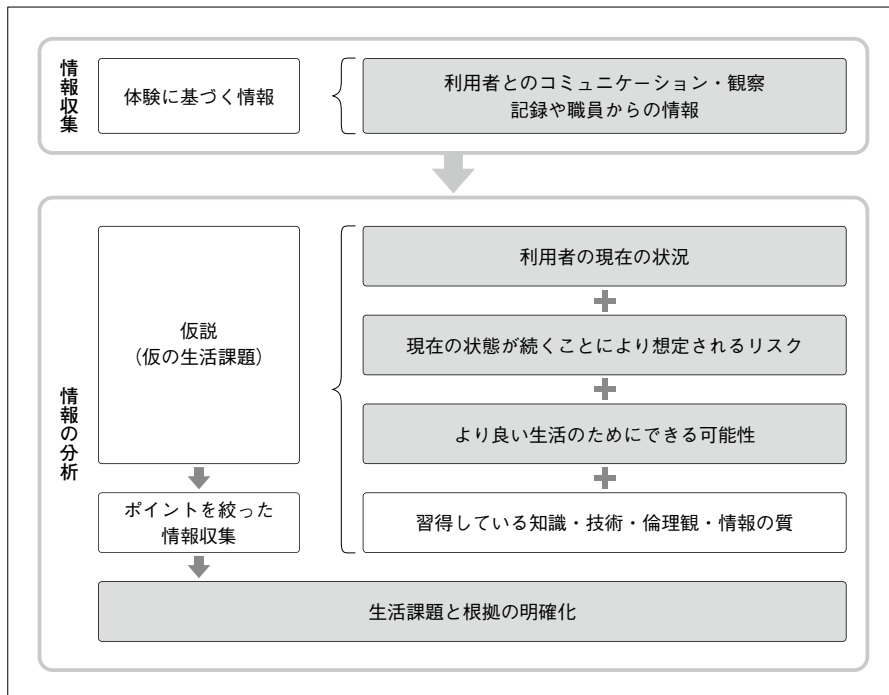


図2 仮説思考を用いた生活課題と根拠の明確化についてのプロセス

介護過程は他の授業との連動性が高いことから、対象利用者をイメージしやすくする教授に加え、学生の知識を再確認する意図的な問いも重要であった。ノーマライゼーションやパーソン・センタード・ケア等、介護実習先の施設種別に合わせた課題を提示することで、学生は収集した情報に学習した知識をより統合化させやすくなったと考える。その結果が、介護過程の目的である「より良い生活の実現」、「その人らしさの再構築」の理解につながり、「できる可能性」を考えることができる学生の育成につながっていた。反面、抽出した生活課題が「余暇・役割活動の充実」が高い割合であることは、学生という第三者の視点で客観的に利用者を観察した際、現在の生活をさらに充実させる必要がある利用者が多く存在しているのではないか、という考えも否定できない。これらの考察からも、生

活支援の専門職として、知識と技術、倫理観を統合化させ、思考力と実践力を培う介護過程を学習する重要性が高いことがいえる。

V | 結論と課題

今回の研究では、「対象利用者のイメージの構築」に重点を置いたことで生活課題が具体的に捉えられ、根拠を明確にするための「仮説思考」が成り立った。さらに、体験に基づく情報収集の結果から抽出された仮の生活課題のイメージを、「利用者の現在の状況」+「現状が続くことにより想定されるリスク」+「より良い生活のためにできる可能性」のカテゴリーで統合化させ、「生活課題と根拠の明確化」を導く情報分析プロセスを見出すことができた(図2)。学生の知識、技術、倫理観の習得状況や、情報収集の質により根拠の妥当性に差が生じることが予測されるが、研究

を継続してさらに有効性を確立させていきたい。また、高齢者分野だけではなく、障害者支援の分野での有効性を含め、根拠を明確にする今回の情報分析プロセスを、生活支援の現場で働く介護福祉職を対象としても活用できるかを検証していきたい。

介護過程の教授が体系化され実践にいかせることは、利用者の生活の質の向上につながるが、多様な学生への教授は常に工夫を凝らす必要がある。介護過程の授業内容に思考力が重要であるよう、わかりやすい教授方法を今後も探求していく。

謝辞

本研究に協力してくださったA短期大学、B専門学校の教員の皆様、ならびに学生の皆様に深く感謝申し上げます。

◎参考文献

- 公益財団法人日本介護福祉士養成施設協会, 2021,「令和2年度社会福祉推進事業 介護福祉士養成施設の教員の教育力向上に関する調査研究事業 報告書」(2023年3月13日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000791452.pdf>).
- 公益財団法人日本介護福祉士養成施設協会, 2019,「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業 報告書」(2023年3月13日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000525760.pdf>).
- 介護福祉士養成講座編集委員会, 2022,「最新 介護福祉士養成講座 9 介護過程 第2版」中央法規出版株式会社.
- 光成研一郎, 2020,「第1部 教育の方法・内容と指導 第1章 教育方法」, 武安有監修・塩見剛一・成山文夫・西本望・光成研一郎編『教育のアイデア 教職・保育士を志す人のために改訂版』昭和堂:5.
- 佐藤浩章, 2021,「第6章 教授法」『実務家教員の理論と実践 人生100年時代の新しい「知」の教育』学校法人先端教育機構 社会情報大学院大学出版部:114-116.
- 平野啓介, 2020,「介護過程の教授方法の再検討-介護実習Ⅱを終えた学生に対するアセスメント部分の調査を手がかりに-」旭川大学短期大学部紀要 第50号:35.
- 小川理紗・森永牧子,2022,「介護過程における介護教育実践の検証~三短大介護過程実践報告会10年の総括から~」九州大谷研究紀要,第48号:414.
- 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子,2014,「学びの技 14歳からの探求・論文・プレゼンテーション」玉川大学出版部:84.
- 佐渡誠,2018,「『ゴール仮説』から始める問題解決アプローチ」すばる舎:46-47.